

みくら

2015.2 vol.6

これからのお寺を考える情報誌



表紙

やすらぎ聖観音

●真言宗智山派 成就院 永代供養墓「称観堂」(東京・東上野)



与楽

抜苦

「与楽」と「抜苦」

●真言宗智山派 成就院 永代供養墓「称観堂」(同上)

永代供養墓「称観堂」は、「やすらぎ聖観音」をお祀りする「与楽」と、「ご遺骨をお納めする「抜苦」の二つのお堂で成り立ちます。

「南無観世音菩薩」とお称えしながら、八の字にお参りすることで「自身のご功徳を積むことができ、仏さまに祈りの思いを伝えることができます。



「称観堂」上から

真言宗智山派 成就院

〒110-0015 東京都台東区東上野 3-32-15

<http://members2.jcom.home.ne.jp/jyojyuin/>



「やすらぎ聖観音」

この聖観音像は、東日本大震災の大津波でなぎ倒された、岩手県陸前高田市の高田松原の被災松を材としています。郷土の誇りであった高田松原は失われてしまいましたが、その松の一本は観音像へと姿を変え、多くの方の思いを受け止める仏さまとなりました。

制作：「五葉舎」仏師 佐々木公一師

目次

- 2 寺院の社会貢献 災害時協力**
稲場圭信 (大阪大学大学院人間科学研究科准教授)
 - 10 気仙三十三観音霊場再興という「支縁」活動**
福田亮雄 (真言宗智山派成就院住職／「祈りの道」再興プロジェクト代表)
 - 20 石巻 門脇町・ひばり野町・南浜町 祈りの杜**
会長 樋口伸生 (無量壽庵住職／浄土宗西光寺副住職)
 - 26 「寺業」は仏教界を変えるか**
西出勇志 (共同通信長崎支局長)
 - 34 お寺に生きる一ひとさじの会の活動を通じて**
吉水岳彦 (浄土宗光照院副住職)
- 表紙：やすらぎ聖観音
真言宗智山派成就院 永代供養墓「称観堂」(東京・東上野)

みんてら

これからのお寺を考える情報誌

第6号 2015年2月

寺院の社会貢献 災害時協力

稲場圭信

大阪大学大学院人間科学研究科准教授

近年、宗教の公益性、公共性、社会貢献をめぐる議論が活発化してきている。一方で、政府にも民間にもできない宗教独自の領域にこそ、宗教の存在の真価があると考える者もある。筆者は、宗教が個別の宗教的本質や意義を持っていることを否定するものではないが、宗教者が、一人の人間として社会貢献活動をする、災害時に被災者を受け入れたり、苦難にある人に寄り添ったりといった社会的行動を重要視する。東日本大震災以前の日常においても自殺念慮者や経済的困窮者に寄り添う宗教者がいた。文化支援やNGO活動の支援など宗教者や宗教団体の社会貢献は多岐にわたる。しかし、世の中の多くの人たちは宗教者や宗教団体の社会貢献活動をあまり知らない。宗教者や宗教団体による社会貢献の取り組みを社会に伝えてゆくことも必要である。東日本大震災後、筆者は宗教の社会貢献と利他主義に関する本、『利他主義と宗教』（弘文堂）を上梓した。また、二〇一三年には、『震災復興と宗教』（明石書店）を刊行した。

社会に開かれた仏教

東日本大震災という未曾有の大災害時に、寺社・教会・宗教施設は、緊急避難所・救援活動拠点として場の力を発揮した。気仙沼のある寺院では、住職が避難者のある夫婦の結婚記念日を知って、避難生活の中でさやかなお祝いをした。そして、楽しく過ごすことを心掛けた。夕方には、良いこと、楽しいこ



稲場圭信・黒崎浩行 編著
『震災復興と宗教』
明石書店

稲場圭信 著
『利他主義と宗教』
弘文堂





稲場圭信 (いなば・けいしん)
 大阪大学大学院人間科学研究科・准教授
 1969年東京生まれ。東京大学卒、ロンドン大学キングスカレッジ大学院博士課程修了。宗教社会学博士。
 主著『利他主義と宗教』(弘文堂)。

とだけを皆に報告した。そのことを避難者も感じていた。「私、いま、悪口言ってしまった。ペナルティね」と避難者たちも愚痴や悪口をなるべく言わないで、明るく過ごそうとした。学生ボランティアなど、若い人も寺院に泊まった。夜には、避難者の方々に、今日は、「〇〇県の〇

〇さんが来てくれました」と住職を紹介した。宗派も関係なく、また、一般のボランティアを含めて受け入れ、交流があったという。

一〇〇名が避難したある寺院には、行政などから届く物資を取りに来る人を含めると四〇〇名程度が出入りした。その寺院の住職いわく、「都会ではないから、みなでお互い助け合うという意識が強い。見て見ぬふりができない関係」がある。地域住民とは前からつながりがあつた。祭りを開催し、五〇〇人以上が集まる。祭りでは、歌や踊りを楽しみ、お酒を交わしながら人々が本音で意見をぶつけあう。住職は、寺院の敷居を低くして、同じ目線で、若い人たちが集える「開かれた寺」の

スタイルを確立してきた。

避難所運営で、祈りや座禅といった時間は無かったという。目の前に起こっていることを次々とこなすだけという状況だった。避難者に寄り添うことが本場の宗教と言いつける住職は、「人間」としてのつながりを大切にす。「社会参加、社会貢献」ということは思ってもみなかったが、意識せずにそういうスタンスでこれまでやってきた」と淡々と語った。

普段、運送関係の仕事をしている若い僧侶は、軽トラックを運転して被災地に駆けつけた。「運送の仕事では、お寺以外のところで社会と接点を持ち、学ぶことが多い。お檀家さんとの寺での交流だけではわからないことを学べる。社会での経験も、

いずれお檀家さんとの関係に生かせたらと思う。まだ、そのような段階ではないが」との語りからは、社会に開かれた寺のあり方を模索している若き僧侶の飾らない心が見えたようであった。

心のケア

東日本大震災の被災地の寺社・教会・宗教施設には、「資源力」(広い空間と畳などの被災者を受け入れる場と備蓄米・食糧・水といった物)があつた。檀家、氏子、信者の「人的力」があり、助け合い、支援活動が行われた。そして、祈り、人々の心に安寧を与える「宗教力」があつた。寺社・教会・宗教施設で避難生活を送った人たちは祈るなどの宗教行為を強制され



2013年3月29日に開催された大阪大学未来共生セミナー「被災地の復興を考える」

たのではなく、自然と祈りたくなった人たちがいたのである。

やがて仮設住宅ができ、避難所の被災者が移動する頃になると、ボランティアの数も減っていったが、宗教者たちの「心のケア」の活動は続いた。仮設住宅での生活支援、傾聴ボランティアなどである。何でも屋、御用聞き、土台のお手伝いなど「丸ごとのケア」をする宗教者たちに信頼を寄せる被災者もいる。悲しみに打ちひしがれ、苦しみを背負ってどうにか生きていく人々への共感によるつながり「共感縁」に基づいた寄り添い、「丸ごとのケア」をする宗教者たちが、さまざまな縁を喪失した人たちの生きる歩みの伴走者になっている。

震災後を避難所でもともに生き



共生地域創造財団・仙台事務所にて。
筆者（左）と川浪剛氏（右）、2011年7月

抜いた人たちは、仮設住宅への入居と同時にバラバラになるケースも多い。そこに、宗教者が丁寧にニーズを聞き、支援を続けている。寺院での花見なども、三ヶ月の間、ともに苦しみを分かち合い、生き延びた後にバラバラに仮設住宅へ入居しなければならなかった人たちが、

再会を願って僧侶に依頼して実現したものである。被災者の声をもとにした、「心のケア」の取り組みである。共生地域創造財団・仙台事務所で支援活動を続けた大阪の真宗大谷派僧侶、川浪剛氏は、「物資を通じた心のケア」を実践した。川浪氏は、何度も被災者



「未来共生災害救援マップ（略称＝災救マップ）」 <http://www.respect-relief.net/>

のところに通り、物資を届けた。携の必要性を筆者は強く感じた。通い続けることによって、被災者がいろいろと話してくれるような関係性ができる。お茶を飲みながら、自然と会話が生まれる。被災者は、そのようなときに、津波のことや家の修復のこと、費用のことなどを話す。その話から他の支援機関につなぐこともある。物資がコミュニケーションツールとなって、「丸ごとのケア」への足掛かりと なっていた。

大災害への備え
「未来共生災害救援マップ」
（略称＝災救マップ）

東日本で続く余震に加えて、南海トラフ巨大地震はいつ何時発生しても不思議ではない状況下で、平常時からのそなえと連

「自らの至らなさを市民の尊い命を奪ってしまった」と嗚咽しながら佐藤氏は語った。佐藤氏と親交が厚く、気仙沼市の防災対策にも長年協力してきた工藤霊龍住職の寺院での聞き取りの時のことである。住職は、「佐藤さんが長年取り組んだからこ

未来共生災害救援マップ(略称: 災救マップ) ロゴアウト

都道府県: 市町村: 地震等:

施設名:

施設の種別: 学校 公民館 公園 神社 寺院 キリスト教会 その他の施設

避難所の種別: 広域避難場所 一時避難所 収容避難所 その他避難所 その他 種別

RESPECT **大阪大学**
OSAKA UNIVERSITY

備蓄情報の詳細 - Google Chrome

www.respect-osaka.net/GetStockData.php?id=29

品名	規格	数量	単位	消費期限
アルファ米		3000	食	
毛布		850	枚	
ごび		850	枚	
おむつ (乳幼児)		540	枚	
おむつ (高齢者)		302	枚	
生理用品		5016	個	
簡易トイレ		30	個	
ハンマー		2	個	
バール		4	個	
大バール		1	個	
めこざり		2	個	
スコップ		2	個	
ツルバシ		2	個	
鉋矢		3	個	
大鋸		1	個	
切断用具		2	個	
チェーンブロック		1	個	
油圧ジャッキ		1	個	
ロープ	径9mm×20m	2	本	
安全ヘルメット		15	個	
携帯用拡声器		8	個	
担架	L2250mm×W540mm	1	個	
携帯用投光器		2	個	
防水シート	5400mm×5400mm	5	個	
水バケツ		10	個	
軍手		24	個	

「未来共生災害救援マップ(略称: 災救マップ)」の備蓄情報

そ、避難して救われた命がたくさんある」と言ったが、佐藤氏は、「命が失われたことは事実。やるべきことはたくさんある」と、避難場所をつなぐこと、備蓄の重要性、全国レベルでの救援マップの必要性を筆者に語った。そして、筆者は、東日本大震災の発災から約一週間後に黒崎浩行氏らと立ち上げた「宗教者災害救援マップ」をもとに、全国レベルの平常時から利用できるマップ作りを構想した。その約一年後、二〇一二年一月、大阪大学・未来共生イノベーター博士課程プログラム(文部科学省採択)の一環として予算がつき、筆者が責任者として指揮をとり、半年かけて「未来共生災害救援マップ(略称: 災救マップ)」を構築し、二〇一三年四月にインターネット上に無償で提供した。

各地域の防災の取り組みとしての防災マップは存在するが、全国の指定避難所および神社・教会・宗教施設を集約したマップは存在しなかった。今回、構築した災救マップは、全国約八万件の避難所および約二十万件の宗教施設のデータを集積した日本最大のマップだ。すでに各施設の所在地、連絡先等のデータは入力済である。一部、自治体の協力を得て、食糧や備品の備蓄状況も登録している。また、後述する自治体と宗教施設の災害協定などの情報も登録している。

地域で防災を考え、備蓄をすることは、地域コミュニティのつながりを作り出すことにもな

る。同じ地域の避難所および宗教施設で、水・食料の備蓄品の消費期限を数か月ごとにずらして設定し、消費期限が近づいたらフードバンクなどへ寄付する、あるいは、地域で防災を考えるイベントを開催し、皆で食べる。そして、また新しい備蓄品を購入するといったサイクルだ。その連携のプラットフォームにも

災害マップは使用できる。災害マップはシステムを構築して終わり、でなく、防災の取り組みを通して、自治体、自治会、学校、寺社・教会・宗教施設、NPO などによる平常時からのつながり、コミュニティづくりに寄り、災害時には救援活動の情報プラットフォームとなることを目指している。将来的には、施設ごとのイベント情報、子育て

支援などの情報も登録・発信できるようにする予定である。

今回の東日本大震災では、一〇〇ヶ所以上の宗教施設が避難場所となった。そのことが、世の中に少しずつ認知されるようになった。『第十一回学生宗教意識調査報告二〇一三』によると、災害時に宗教家や宗教施設が果たせる役割として期待されるものに、避難場所となるスペースの提供（五八・三％）が、心のケア（五〇・九％）や、供養や慰霊が（四〇・〇％）よりも上位にあがっている。東日本大震災後、宗教施設と災害協定を締結する自治体が増えている。筆者は、全国の自治体と宗教施設の災害協定の実態

二〇一四年七月に全国調査を実施した。九五の自治体が三九九の宗教施設と災害協定を締結していた。また、協定は結んでいないが、指定避難所となっている宗教施設や、災害協定なしで協力関係があるものが二〇八

自治体、二〇〇二宗教施設あった。そして、自治体と宗教施設の災害協定のうち、一六七施設が、東日本大震災後の締結であった。今後、自治体と宗教施設の災害協定・協力は益々増えていくであろう。協定の内容は、避難場所としての施設の提供、応援機関等の活動拠点としての施設の提供、津波発生時において緊急避難場所として使用、災害時に公設の避難所が開設するまでの一時的な収容施設として活用、災害時

に帰宅困難者の一時滞在施設として使用、遺体安置所として使用、備蓄品の相互援助を目的とした大規模災害相互物資援助協定など、その地域と施設の事情にあわせて、多様な内容となっている。

兵庫県多可町は町内にある三十五ヶ寺の本堂を災害時に使用し、かかった費用は町が負担するという協定を地元仏教会と締結している。東京都台東区は浅草寺を帰宅困難者の受け入れ先とし、区の負担で発電機などを設置した。憲法第二十条（信教の自由）や第八十九条（公金支出）に抵触するとの声もあったが、宗教施設が仮遺体安置所や避難場所となった際には、自治体や、その費用を支出する協定が締結されているのだ。

多くの人が、家を失い、家族

を失い苦難の状況にある大災害

時に、寺が、宗教施設が門戸を

閉ざすという選択肢はないので

はなからうか。一人の人間とし

て動くのが当然ではないか。一

般の人たちも救援活動に奔走し

た。宗教者であれば、尚更とい

う声もある。そして、南海ト

ラフなどの大地震が起これば、

NGO、行政の力だけでは足りな

い。宗教者の救援活動、宗教施

設の避難所運営は社会的要請で

もある。

だと思ふようになった」と答え

た人の割合が七九・六%だった。

利益と効率のみを追求し、人を

物のように使える・使えないで

切り捨て、自己責任論のもと個

人に過剰な負担がかかる社会。

勝ち組・負け組の分断社会。地

縁・社縁・血縁が失われてゆく

無縁社会。つながりがそぎ落と

されてきた社会にあつて、大震

災により、未曾有の大災害によ

り、人々の中に眠っていた思い

やり、お互いさまの感覚、共感

する心が再生したのではないか。

そして、あの大震災から二年

以上が経過して、震災の風化も

耳にするが、二〇一三年の調査

でも、「社会における結びつき」

を震災前よりも大切に思ふ人

は、以然として七七・五%と高

い。これはソーシャル・キャピ

タル（社会関係資本）の高まり

とも言える。ソーシャル・キャ

ピタルとは、社会のさまざまな

組織や集団の基盤にある「信頼」

「規範」「人と人との互酬性」で

ある。そのソーシャル・キャピ

タルが豊かなところは、組織や

集団として強く、思いやりによ

る支え合い行為が活発化し、社

会のさまざまな問題も改善され

る。

欧米では、ソーシャル・キャ

ピタルとしての宗教に対する関

心が高い。宗教が、人と人との

つながりを作りだし、コミュニ

ティの基盤となる可能性がある。

そして、そこに宗教的利他主義

との関連が論じられる。他人を

信頼しにくい社会、人間関係の

希薄化はソーシャル・キャピタ

ルの減少をもたらす可能性があ

るが、宗教が、人と人とのつな

がりを作りだし、コミュニティ

の基盤となる可能性もある。

筆者は、宗教の社会貢献を「宗

教者、宗教団体、あるいは宗教

と関連する文化や思想などが、

社会のさまざまな領域における

問題の解決に寄与したり、人々

の生活の質の維持・向上に寄与

したりすること」「稲場圭信『利

他主義と宗教』五〇頁」と定義

している。ここには、ソーシャ

ル・キャピタルとしての宗教、

すなわち、宗教文化・空間・思

想が与える安心、地域コミュニ

ティにおける人と人とのつなが

りがある。

宗教を信じることによって、

その信じた人の価値観、世界観

がその宗教により築かれ、その

宗教により説かれる利他主義も

ソーシャル・キャピタルと しての宗教

二〇一二年に実施された内閣

府の「社会意識に関する世論調

査」で、社会における結びつき

を「東日本大震災前よりも大切

その信者の生き方を規定し、利他的精神を滋養するのであれば、利他主義を説く宗教を信じて深い関与がある人ほど、利他性が強いことになる。欧米の学者たちは、宗教が人を利他的にする

と指摘している。日本においても、信仰する宗教があることはボランティア活動の参加頻度を高める、ということが分かっている。

今、人の心に寄り添い、人の艱難辛苦に共感し、物事に幅広く対応できる力が現代人に求められている。そして、信仰生活には、そのような利他的な心を育てる教えと取り組みの環境がある。諸宗教が、利他主義、他者への思いやりと実践に関する教えを持っている。畏敬の念、神仏のご加護で生かされている

という感謝の念が、人を謙虚にし、自分の命と同様に他者の命も尊重させる可能性がある。おかげ様や恩返しといった感謝が思いやり、利他的行動の動機ともなろう。

今後の課題

今、行政の防災計画は大きく変化している。従来の指定避難所だけでは、地域住民を収容できないことが判明したからだ。

釜石市は二〇一三年一〇月、同市と大槌町の一七寺院で組織する釜石仏教会と、災害時に寺院を避難者収容施設とすることなどを定めた「地域の安心確保連携協定」を結んだ。京都市は二〇一三年一月大規模地震などの災害発生時に多くの観光客が帰宅困難になることを想定し、

市内の清水寺、東本願寺などの寺院を一時的な避難場所や滞在場所として提供してもらう協定を提携した。そして、奈良県斑鳩町は、二〇一三年一二月に法隆寺と、境内を避難所とする「災害協定」を締結した。

在であった。宗教者が、平常時から自治体の町作り協議会や社会福祉課、防災課と連携しているところは災害時に連携の力を発揮した。日ごろからの取り組みが大切だ。

災害対策基本法が改正され、

祭、現代版寺子屋などに加え、NPOやボーイスカウトなど、

二〇一四年四月から、各市町村において緊急避難場所及び避難所を指定・更新することが定められている。行政、自治体、他の民間支援組織と宗教施設の連携の動きは、今後、益々広がっていくだろう。しかし、災害時の協定が自治体と宗教施設で結ばれたとしても、それだけでは機能しない。東日本大震災の被災地で緊急避難所、活動拠点として機能した宗教施設の多くが、日頃から地域社会に開かれた存

様々な社会的アクターと連携した地域ぐるみの取り組み、防災の取り組みが、宗教を地域に開かれたものとしていく。宗教がソーシャル・キャピタルの源泉として社会に寄与できるのではないか。確かに、未曾有の大震災により「共感縁」が誕生した。どこまで続くか。単なる傍観者となるのではなく、関与しながら、動向を見ていくことも必要であろう。

気仙三十三観音 霊場再興という 「支縁」活動

福田亮雄

真言宗智山派成就院住職／「祈りの道」再興プロジェクト代表

はじめに

今年の3・11に陸前高田を訪れた際、気仙川右岸の山から気仙川をまたぐ長大なるベルトコンベヤー専用の吊り橋が架かっていました。被災地の風景は来るたびに少しずつ変わって

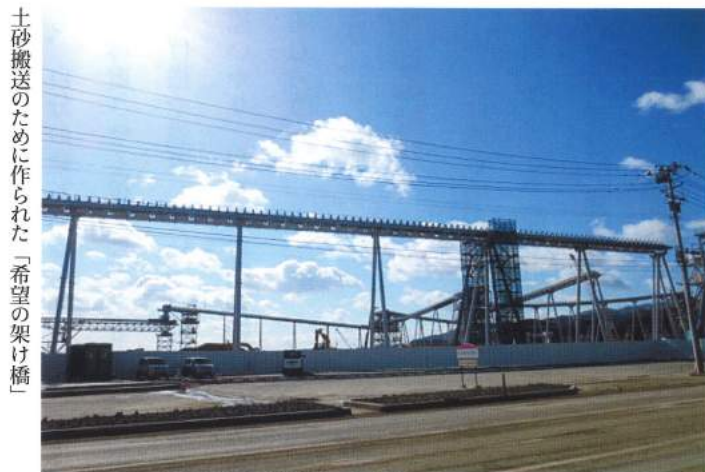
く。主塔の高さは四二・六メートル。山を崩して宅地造成をする際に出る土砂を、およそ一キロ先の臨海部の仮置き場に搬送するための施設である。その土砂は土地のかさ上げに使用される。この橋の完成により、土砂の搬送にかかる工期が三分の一

に短縮されるという。総工費二二〇億円、名称は「希望の架け橋」。

気仙三十三観音霊場との出会い

に短縮されるという。総工費二二〇億円、名称は「希望の架け橋」。

はじめに私が、岩手県気仙地城（陸前高田市、大船渡市、住田町）を訪れたのは、二〇一一年一〇月、以前より参加していた「ひとさじの会」のメンバーに誘われたからであった。ひとさじの会とは、浄土宗僧侶が立ち上げた、浅草・上野・山谷地域において月に二度、炊きだし



土砂搬送のために作られた「希望の架け橋」

吊り橋を仰ぎながら走る車の中で、高田の方々が思う「希望」とは何かと考えた。「復興」という言葉がすぐ浮かぶ。では何をもち「復興」というのか。また被災地の方に「寄り添おう」とよく聞くが、何をもち「寄り添う」といえるのだろうか。あてどもなく考

えが浮かび、そしてまとまるでもなく消えていく。荒れ果てた土地が延々と続く陸前高田の風景は、いろいろなことを私に問いかけてくる。

だし、お茶っこの会、子供会等

の活動を行ってきた。

一〇月というと、体育館での長い避難所生活を終え、ようやく仮設住宅に入居することができ、ホッとしたという時期であった。仮設住宅の集会所で

おばあさんたちとお茶を飲みながら話をしていると、「津波でお仏壇もお位牌も流され、手を合

わせる対象もない。仮設に入れたが壁が薄く、隣の方も身近な方を亡くされているかと思うと、

声をあげて泣くことも出来ない。心静かに手を合わせるところ、ほっとできる場所が欲しい」とおっしゃる。

ちょうど同じころ、ひとりのおばあさんから、地元には観音霊場があり、若いころには一生に一度一週間かけて歩いてお参りをする風習があったというこ

とを伺った。

これが「気仙三十三観音霊場」の出会いだった。

いま、気仙の方々に気仙三十三観音霊場を知っているかというたとき、ほとんどの方が知っているとお答えになるはずだ。ただし、住まいの近くにある

二、三の霊場のみ。他の霊場を知っている方はまれで、すべてをお参りしたという方は本当に極わずかである。

日本が高度経済成長期を迎え、車社会になってからは、村の外へ、都会の方へと関心が向かったのだろう。「気仙三十三観音」

の地域の中での存在は、時の移りゆきとともに、少しずつ薄らいでいった。とはいうものの、昔から当たり前のようにそこにあった観音

堂の存在とは、家族の安寧を祈る場であり、亡くなった方に祈

りを捧げる場でもあり、地域の方々の交流の場でもあった。観

音堂は地元の方の心よりどころといつてよい。また、たとえ少しの間、故郷を離れていたとしても、大切な方の思い出を語りあう場ともなり得るもので

あろう。多くのものが津波で失われてしまった「いま」、新たなものを作り出すのは必要である。しかし、地元気仙に先祖代々

大切に伝えられてきた観音霊場をもう一度見つめ直し、人々の心のよりどころとして改めて息を吹き込み機能させるといふこ

とは大切なことなのではないか。そんな思いでこのプロジェクトはスタートした。

気仙三十三観音霊場の魅力

気仙三十三観音霊場は、江戸時代半ばの享保三（1718）年、高田村の検断役佐々木三郎左エ門知則が、父母の安楽追善供養のために選定したと古の本に記される。

気仙三十三観音霊場の中には、平安時代開基と伝えられる「気仙三観音」―長谷寺、常膳寺、観音寺―がある。これらの寺には、坂上田村麻呂の伝説が伝えられる。

平安時代、蝦夷（えみし）と呼ばれる人々と都の人々との間で戦いが起きた。この辺りが当時の「国境」であったのだ。伝えによれば、戦いによって亡くなった敵味方の兵士の霊を弔うためにお寺を建て観音像を安置



気仙三十三観音 二十二番札所
長谷寺御本尊十一面観音像

したとある。寺とは、慰霊・鎮魂の場であったというだけでなく、高度な都の文化を見せつけるための場でもあり、都の勢力圏を示す指標でもあったのだろう。古につながる豊かな物語を抱え持った霊場と言える。

第二十二番長谷寺は、事前に連絡すれば平安仏のご本尊十一面観音像を拝することができる。また、江戸時代には東北の長者と言われた稲子沢家が第十九番霊場となっている。三代にわ

たって京仏師によって作られた百観音は、今では「えさし郷土文化館」奥の院にて拝することができる。その数、細かな造りに圧倒される。昔、年に一度の開帳の日には、遠くから多くの方々が集まったとか。

さらに、特色の一つとして、霊場のうち、一般のお宅がお堂をお守りしているところが三分の一以上あることがあげられる。月に一度講員が集まりお新香や煮物を持ち寄ってお茶っこの会をしているところ、母屋の裏手に観音堂がありいつも綺麗にお掃除をしてくれているところ、海を望む巖の上に立ち航海の安全が祈願されているところなど、まさに気仙の方々の生活の中に溶け込んだ霊場だといえるだろう。

2012.3.11

「気仙三十三観音霊場再興プロジェクト」始動

気仙地域は、気候が温暖で冬もあまり雪が降らず、東北の南国といわれるそうである。また、霊場の半数以上がある陸前高田市は、リアス式海岸が連なる三陸沿岸部において広い平地があること、昔から地域の経済が発展し文化の中心であったことなどから、「楽園」ともいわれたという。しかし、津波は高田の中心部である平野部分をすべて呑み込み、気仙川を7キロ以上もさかのぼった。

海から山際までのおよそ一五〇メートルは荒れ地が延々と続き、スクラップのようになつた車があちこちに片寄せら

れ、津波に打ち抜かれた役場や

病院、公団住宅、学校などのコンクリートの建物が荒れ果てた姿で建っていた。家の跡には土台だけが残り、ここそこに花が手向けてあり、喪服を着たご家族がしゃがみこんで手を合わせていた。その中を車で走り、第三十三番浄土寺さんで行われた一周忌の追悼法要に参列した。

浄土寺さんは、本堂の床上まで浸水したが、かろうじて倒壊は免れた。しかし、庫裡には津波が入りすつかり荒れ果てていた。本堂の回廊と戸はなんとかこの日に間に合わせようと、急ぎ工事をしたという。畳はまだ入っておらず床板の上にブルーシートが敷かれていた。続々と檀家の方々が集まってくる。大きなお堂はいっぱいになり、奥



気仙三十三観音 二番札所 金剛寺門前の風景

の方まで檀家の方に入ってもら
う。それでも入りきらず、外で
待っている方も大勢いた。

法要の中で、亡くなった方の
お戒名を一〇名ずつ読み上げ、
南無阿弥陀仏と十返お唱えする。
またお戒名を読み上げお十念

……。亡くなった方の数二八六
名。最後に堂内にいるすべての
方々のお念仏の音が響いたとき、
悲しき充ち満ちて、その悲しみ
がお念仏とともに全身に重く重
くのしかかってきた。最後にご
住職からご挨拶、「この一年の

皆様のご苦勞を思うと涙が止ま
りません」。すすり泣きがこ
こそこで聞こえた。

私はたまたまこの場に身を置
いているのみ。でも、にもか
くにも悲しい。ああ、何かをし
たい。何かをしなければ。

心のふるえが体へと伝わって
いった。

それから急ぎ、大船渡中学校
仮設住宅の集会所に戻った。朝
に伺ったとき、仮設の集会所で
法要を行って欲しいと突然求め
られたのだ。市が行う合同慰霊
祭には行けない人がたくさんい
ると聞いた。会場へ向かう車の
手配ができない方、黒い服がな
い方、大勢の方とは顔を合わせ
たくない方、と理由は様々であ
る。

男女問わず幅広い年齢層の方

大船渡中学校仮設住宅の集会所



が大勢集まった。七〇名程度い
たのだろうか。皆で海の方を
向かって三〇分お念仏をお唱え
する。今まで考えないようにし
てきた従兄弟のことを思い出し
たら、いろいろなことが思い出
されたと号泣されている方もい
た。みなさん声をそろえてお念
仏ができてとても良かったと喜



気仙三十三観音 二十八番札所
立山観音堂は被災し、土台と床板のみ残っていた

んでくださった。

一人の方に「大船渡で自慢できるものは何ですか」、とお尋ねしたところ、少し考えて、「海がきれいなこと」とお答えになった。

二〇一二年三月十一日。この日から、「祈りの道 気仙三十三観音霊場再興プロジェクト」が始動した。

気仙三十三観音の被害状況

果たして霊場はどれだけ残っているのか。どの程度の被害を被っているのか。

まず、すべての霊場を巡り、被害状況を把握することから始めた。一般の民家でお守りしている霊場は、なかなかわかりにくい。車を止めては歩いている方に教えていただき、ひとつつ

とつ辿っていった。ご住職や別当の方にお会いすれば、活動の主旨をご説明する。霊場を管理

こそあれ、大きな被害を受けていることが判明した。

されている方で仮設にお住まいの方は、ご近所の方に住まいを

「気仙三十三観音再興プロジェクト」実施事業

伺い訪問した。合わせて陸前高田市・大船渡市・住田町の観光協会にもご挨拶。また地元につながる伝承念仏を教えてください。機会も得た。三度の気仙行きを重ね、被災状況が分かった。

「気仙三十三観音霊場」を再興しようと声をあげたものの、観音霊場再興の前例を聞いたことがない。アイデアを温め、反芻し、検討を加え、そして徐々に具体化していった。以下に、実施した事業について列挙したい。

- ①観音像、お堂、管理者の住居が被災した霊場は、立山観音堂、②お堂、管理者の住居が被災した霊場は、金剛寺、要害観音堂、③お堂が被災した霊場は、泉増寺、坂口観音堂、④管理者の住居が被災した霊場は、羽縄観音堂、田端観音堂、熊野神社、熊野堂、浄土寺。

計九箇所の霊場が、程度の差

活動内容には、大きく、①気仙地域の方々にとってのよりどころの再興―地縁の象徴の再生―また、②観光や地元産業に結びつけて、地域の復興に寄与する―地域の産業の再生―という二つのカテゴリーがある。まずは、観音霊場を再興し気仙の



震災の一月後に発見された気仙三十三観音 四番札所 要害観音堂聖観音像



震災の一週間後、ガレキの中から発見された気仙三十三観音 二番札所 金剛寺御本尊如意輪観音像

方々の心のよりどころを整えていくことが重要であると考えた。

(1)「気仙三十三観音 祈りの道 探訪」マップの発行

新たにマップを作成しようという声もあったが、できるだけ早く印刷・配布した方が地元のお役に立つのではないかということになり、以前、陸前高田市観光物産協会が御苦労して作成なさった霊場マップに被災状況を加えた改訂版を印刷・配布することとした。

(2)「巡礼のしおり」発行

霊場参拝時に簡単な経本が必要なので、般若心経等だけでなく、巡礼の心得も記した「巡礼のしおり」を作成、各霊場にお配りした。

(3)「気仙三十三観音再興プロジェクト」HP作成

気仙三十三観音霊場についての情報があまりにも少ないことから、霊場HPを作成した。活動報告、霊場案内、マップ、ブログ等が記されている。

(4)「お納経」の用紙と朱印作成

霊場の維持にはお納経は重要である。しかし、一般のお宅で管理されている霊場が多いことから、その場で揮毫していただくことは困難である。よって揮毫した用紙を印刷し、合わせてご本尊の種子の印と霊場名の角印を配布した。

(5)「気仙三十三観音霊場への招待」講演会実施

気仙の方にもっと観音霊場のことを知っていただこうと講演会を企画した。

第一回は大船渡カメラアホールを会場に東海新報社の佐々木

克孝氏に「気仙三十三観音めぐ

二〇一四年三月、これからの

なっている。巡礼を行っている

る多くの方にお参りいただいた。

り心の旅」という題で講演いた

気仙の柱となる若者に、鎮魂の

旅行会社数社にも提案した。

前年の八月、気仙の観音さま

だいた。第二回は第三十三番浄

ため、地元のすばらしさを再確

振り返ると、動きながらいろ

の「出開帳」を東京で行い、被

土寺を会場に、岩手県立博物館

認してもらうために、六日間か

いるな方とつながっていき、教

災した四つのお堂の再建資金

主任専門学芸員の佐々木勝宏先

けて気仙三十三観音霊場一六〇

えていただき、気づかせていた

を集めたらどうかと話していた。

生に「気仙のたから―大肝入が

キロを徒歩で巡礼した。大学生

だき事業が展開していった。あ

震災から一週間の後、がれきの

遺したもの―」という題でご講

一人と地元の方二人が参加して

りがたいことだと思ふ。

中から発見された金剛寺ご本尊

演いただいた。

(6) 要書観音堂 聖観音像修復

大震災より一月後にがれきの

報」紙上に十一回に分け連載さ

もうひとつ「善光寺出開帳

如意輪観音さま、一月後にお堂

中から発見された四番要害観音

れた。

両国回向院」に気仙三十三観音

のうち二番金剛寺のご本尊如意

堂聖観音像の修復及びクリーニ

きかけ

輪観音さまと四番要害観音堂の

音堂聖観音さまをお迎えしたい。

ングを行った。

気仙の観音霊場と被災地を巡

聖観音さまをお迎えできたこと

場まつわる物語を語っていた

(7) 徒歩巡礼道道標整備

ゆくゆくは徒歩で観音霊場を

るツアーとして県外の方をお呼

びできないかと考えている。霊

場HPに、自坊で行った団参を

お参りする方も現れると思ひ、

ベースに気仙をめぐる旅―気仙

二〇一三年四月二十七日より五

していたのを覚えている。

二〇一三年三月、観音さまシー

三十三観音と被災地の「いま」

月十九日まで、両国・回向院さ

その少し後、両国回向院さま

ルを作成し、しるべとして各所

を見るところページを作成した。

まにおいて「東日本大震災復興

で「善光寺出開帳」が行われる

に張った。

案内をコピーすれば、すぐに

支縁 善光寺出開帳 両国回向

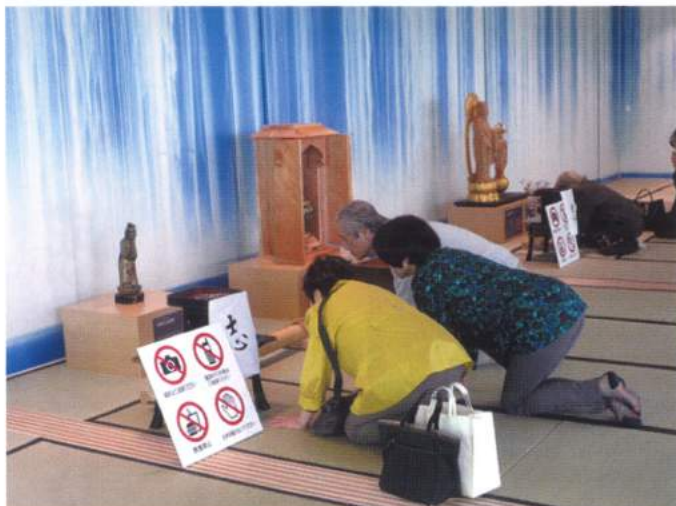
という話が伝わってきた。回向

(8) 大学生と気仙三十三観音を歩

旅のしおりが作成できるように

院」が実施され、四万人を超え

院本多上人に気仙の観音さまを



両国・回向院で実施された
「東日本大震災復興支縁 善光寺出張帳 両国回向院」

お迎えしたらどうかと提案したところ、是非に、とすぐさま太いご縁が繋がった。「ありがたいし」とはめつたにないという意。まさにありがたく尊いご縁である。

新築された念仏堂の二階の広間に気仙にまつわる仏さま―被災地に安置する一光三尊像七

体、高田松原の被災松で建立された親子地藏、要害観音堂聖観音、金剛寺如意輪観音―が安置された。お参りなさる方々は、

畳の大広間であるため靴を脱いで、間近に仏さまを拝すること

が出来た。幾たびか部屋の脇でお念仏を申したが、皆さん説明文を良く読み仏さまを熟視され

た後、固く目を閉じ手を合わせた方をよく見かけた。またある方は、畳にぬかずき礼拝されていた。涙を流しながら拝まれている方もいらつしやう。い

ちように「よく泥の中から現れて下さった」とおつしやうしていた。まさに「ありがたい」という思いであろう。

まが気仙にお帰りになる。そう考えると、心がうちふるえた。

おわりに

不思議なほどいろいろな方とご縁がつながり、また新たなご縁を紡ぎ出し…多くの方のご協力・ご支援をいただいで本プロジェクトが進行している。

『観音経』には観音さまの御功德を「普門示現」と記される。私たちの前にも観音さまが幾たびも現れ、手を引き背中を押しお導き下さったというありがたさを、いつも気仙から帰る車中

にてしみじみと味わう。そして「また、気仙に行きたい」、そう思うのだ。

わせて気仙に団参に来ていただけるよう各所に働きかけていきたいと思っている。是非、この

文を読んで下さった皆様にも気仙に足を運んでいただきたい。

観音さまをお参りし、被災地の現状をご覧いただき、そして海の幸・山の幸を堪能していただきたい。ご家族、檀家の方々、

ご近所の方々などに旅で見聞きしたこと、考えたことをお話し頂きたい。それが大切な「支縁」活動となるのではないかと思います。霊場HPもご一読いただければ幸いです。

これからも、まっすぐにのびやかに気仙の方々と関わり続けていきたい。

▽「祈りの道」気仙三十三観音再興プロジェクトHP
<http://kesenkannon.jimdo.com/>

成就院永代供養墓「称観堂」建立

私が住職を務める成就院にも、納骨堂は既に墓地奥に設置されています。でも、何か片隅に追

いやられた寂しいイメージがありました。墓地の継承が困難になっていくこれからの時代、檀家の方、巡礼の方など成就院を訪れるすべての方々にお手合わせいただける「成就院のお墓」



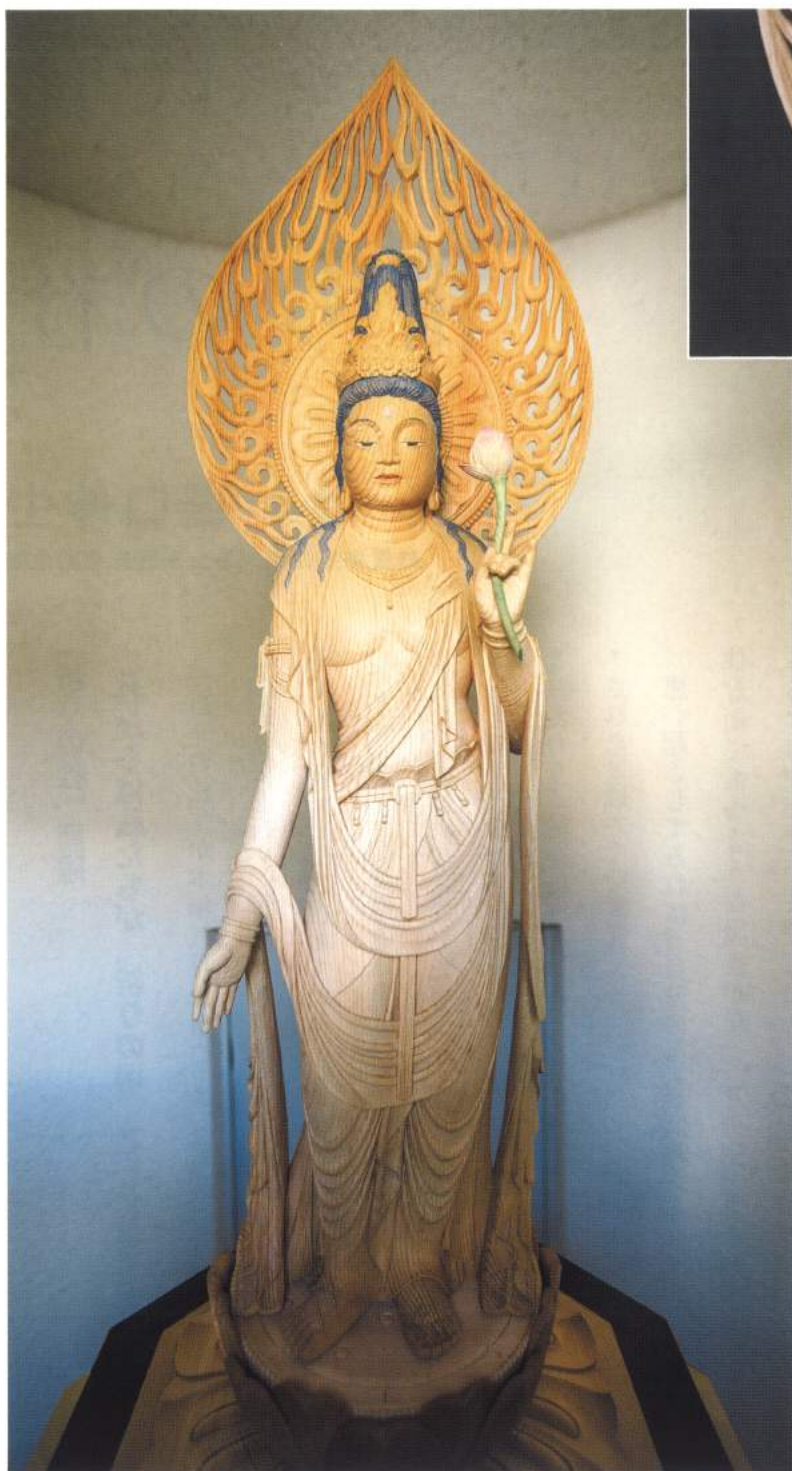
成就院・永代供養墓「称観堂」は、「やすらぎ聖観音」をお祀りする「与楽」と、ご遺骨をお納めする「抜苦」の二つのお堂で成り立つ「与楽」と「抜苦」の周囲には「気仙三十三観音お砂踏み」があり、「南無観世音菩薩」とお称えしながら、八の字にお参りすることでご功德を積むことができ、仏さまに祈りの思いを伝えることができる
石板には各霊場が彫刻されている
(表紙裏ページも参照されたい)

を建立したい、そのような思いから永代供養墓建立計画がスタートしました。

ちょうどそのころ、「気仙三十三観音霊場再興プロジェクト」の活動の中で、気仙の住田町に「五葉舎」という工房を開いたばかりの仏師・佐々木公一さんと知り合いました。佐々木さんは、被災地に住む仏師として地元気仙のために何かをしたいと考え、奇跡の一本松で有名な高田松原の被災松を材として一六〇センチもある白衣観音を彫り進めていたのです。初めて対面したとき、その美しさに心動かされるのと同時に、被災松で作成した観音像を自坊の永代供養墓にご安置したいと考えました。

「称観堂」は、高田松原の被災松を材とした聖観音さまをお祀りする「与楽」と、ご遺骨をお納めする「抜苦」とで構成されます。「抜苦与楽」―衆生を苦しみから救い、福德を与える―という言葉は、観音さまそのものである大慈大悲という仏徳をより具体的に表したものです。「称観堂」の名称は、『観音経』の「一心に名(みな)を称せば、観世音菩薩、即時(たち)に其の音声(おんじょう)を觀じて、皆解脱することを得せしめん」という文によります。

「抜苦」と「与楽」の周囲には、「気仙三十三観音お砂踏み」があり、八の字を描くようにお参りいたします。お砂踏みとは、各霊場境内のお砂を下に敷いた石板をたどることにより実際に霊場を巡礼するのと同じご功德



成就院・永代供養墓「称観堂」の「与楽」にお祀りする「やすらぎ聖観音」。この聖観音像は、東日本大震災の大津波でなぎ倒された、岩手県陸前高田市の高田松原の被災松を材としてつくられている
(表紙裏ページも参照されたい)

が頂けるというものです。

霊場のお砂は、昨年の三月、

徒歩巡礼をしてきたときに頂い

て参りました。霊場名の揮毫は、

成就院檀信徒の方々にお願

いいただきました。中学生から九〇過

ぎの方まで、みなさん精一杯思

いを込めて書いて頂きました。

ありがたいことです。

ご遺骨が納められている方だ

けでなく、東日本大震災で亡く

なられた方、今だ困難な生活を

強いられている方にも思いを馳

せ、お手合わせいただければあ

りがたいと思っています。また

お参りなさった方にも観音さま

からきつと生きるお力を頂ける

でありましょう。

▽摩尼山成就院HP

members2jcom.home.ne.jp/

jyojin/

▽「五葉舎」仏師 佐々木公一師

岩手県気仙郡住田町上有住字中

沢70-1

電話0192-47-3107

sasaki.kimikazu@orange.plala.

or.jp

活動を応援して下さる方へ

今後も継続的に活動を続けていく所存です。ご支援いただければ幸いです。

- ・ゆうちょ銀行
- ・振込先
「祈りの道」再興プロジェクト
- ・口座番号：00-706-790241
- ・振込用紙の通信欄に下記の4点をご記入ください。
①お名前 ②ご所属 ③電話番号 ④住所

石巻

門脇町・ひばり野町・南浜町

祈りの杜

会長 樋口伸生

無量壽庵住職／浄土宗西光寺副住職



樋口伸生会長

「祈りの杜」開眼

これからは私たちが「祈りの場」として育てていく

「祈りの杜」が本年三月九日に開眼法要を行い、正式に被災地で人々の心を受け止めていく「祈りの場」としてスタートしました。ご尽力いただいた多くの方々のお陰様であの場所が生まれ変わり、私達にバトンタッチされたと思っています。思い起こしてみれば、自分の住む街であのような災害が起こると思っていま

た。今でも警戒警報のサイレンを聞くと、大人も子供も体の中

が震え、戦慄を覚えます。それが、被災地として三年を迎えた私達が抱えていかなければならない苦しみです。「あきらめ」「悔しさ」「絶望」といったマイナスの言葉が現状としてあるのが、被災地の風景です。一人一人がその中で暮らしていかなければならない。これも人の歴史の中で繰り返されてきた戦争、災害、事故を、直接肌身で経験した人々が感じてきたものと同じであると、私達は認識しています。いつも申し上げますが、私は幸いなことに自分の家族は亡くなりませんでした。もちろん、



2014年3月9日に開眼法要を行なった「祈りの杜」

親戚、友人は多く亡くなりました。今回、「祈りの杜」をつくるにあたって中心になった遺族会「蓮の会」が、毎月十一日にお寺に来ます。なみだ色の遺族と向き合うとき、どう接すればよいか、毎回悩みます。何も出れない自分に苛立ちを感じ、無

能な自分と向き合っています。

被災者の想い。

「祈りの杜」の必要性

「祈りの杜」をつくったのは、被災し、家族を亡くされた方々がこの街で暮らしていく中で、せめて心を少しでも落ち着かせ、安らかになり、そして自由に泣いたり怒ったりできる場所がほしいと言いだしたのがきっかけです。

自分の家に仏壇やお墓があるではないかと思われませんが、実は身内が悲しみを受け入れてくれない現状があります。仮に私が五二歳で子供を亡くした親だとすれば、私の親は「いつまでも泣いておるな、死んだ者は帰ってこない」というでしょう。そのような言葉が、家族の

関係の中で、子供を亡くした親にぶつけられる。私たちの親世代、昭和初期の方々は人間同士が戦って死ぬ戦争やその他の災害を経験しています。その方々が東日本震災で子供を亡くした若い世代の遺族に、訓示を含みながらも、死をあきらめさせようとしている。

それはある意味必要であり、そうやって生活を歩み始めなければならぬのですが、そうできないのが災害であり、また世代の違いで死の受け止め方が違うのも現状です。だから、自由に自分の心を家の中で見せられない苦しい現状がある。泣くのなら、シャワーを出しながら叫ぶ、一人で車を運転しながら叫ぶ。それしか、自分の心を表現する方法がないのです。遺族は

この街で働いて生きていくわけですが、その中で彼らが心を許せる場所をつくりたいと思ったのです。

被災地には今でも、多くの方々が大型バスで視察に来られます。美しい花をたむけてくれますが、しかし、遺族にとってはどうしても、観光の途中に立ち寄ったと感じられ、「私たちは見せものでない」と憤慨されます。そのような憤りも積み重なり、「自分たちの痛ましいこの土地の中で、誰にも邪魔されない本当に安心できる場所はないか」と、「蓮の会」の方々が自然と言いだしたのです。街にも家にも居場所がないのです。誰にも気兼ねせず、手を合わせることが出来る場所が欲しい、そんな思いからスタートしました。

そして、そのような遺族の願いに、周囲の方々が敏感に反応していただき、物事が進んでいきました。私は立っているだけです。まわりの方々が動き始めてくれたのです。私も友人や遺族の方々と話し合い、「良い場所が出来る。みんなが願う、



開眼法要参列者による献花

祈りを込めて暮らしていく場が、始めたのです。

私たちの何気ない日常の中に出
来る」と思いました。被災者
の心の変遷があり、それに寄り
添ってくれる方々がいて、動き
ました。

菩薩様達が私たちの元へ来て頂いた

ありがとうございます

私は全国から来て頂いたボラ
ンティアの皆様は、仏様の仲間
として、仏様になるべく「菩薩
様」として来ていただいたと感
じています。

この「祈りの杜」をつくるた
めにも、埼玉県石材業協会青年
部の方々が三週間にわたってお
寺に泊り、作業をしていただき
ました。東北の縁もないお寺を
助けなくていけないと思う気持
ちはまさしく「菩薩の精神」で
す。私はたくさんの菩薩様に、

上に大きく壊れてしまったのは、

震災後の自衛隊による遺体捜索
のためでした。遺体捜索作業の
ために重機がお墓の上に乗る、
墓石も遺骨もバラバラに傷つき
ました。

震災から三年、今、お墓は加

速度的に修理され、六割程度復
旧しています。「お墓を戻せて
良かった」という気持ちと、ま
た「これしかできなくて申し訳
ない」という気持ちがあります。

震災前にあつたお寺の門前町
は全て流されました。住んでい
た人は平均年齢七〇歳から八〇
歳の方々に、子供さんたちは他
の場所に住み、お寺の周りはお
年寄りばかりでした。その方々
は今、仮設住宅に居ますが、年
齢的あるいは経済的な問題で、
もとの地に家を再築して住むこ

お墓の修復、再建の現状

西光寺墓地は、「被災地の中
でも特に被害が大きい墓地」と
被災地を巡っている方に言われ
ました。実は震災による被害以

とはできないと分かっています。
そこで自力で家は再建できない
が、最後の家、つまりお墓だけ
は直しておかないと、家族に迷
惑をかけられないし、自分自身
も落ち着かないという気持ちで、
なげなしのお金で墓地を直して
います。死後、納骨していただ
ければ、被災地のあきらめの暮





埼玉県石材業協会青年部
大内浩明会長



(株)菅松石材工業
菅松敏行代表



一級建築士事務所U A
押尾章治氏

らしの中だけでも、最後の小さな望みがかなうというのが、被災地の墓地の現状です。

残りの四割のお墓も、ようやく直し始めました。ところが、

石巻市では、二月

までは残骸となっ

たブロック塀や使

えない墓石を無料

で廃棄してくれて

いましたが、三月

より有料になりま

す。

三年目にしてよ

うやく墓を直そ

うと動き出した人

達、つまり経済的

に困窮した方々が

救われない。行政

は、何を見ている

のか、疑問を感じ

ます。どこを見て復興の度合いを決めているのか、被災地ではそのような矛盾が毎日起こっているのです。

震災の時の

政教分離の捉え方

お寺に溜まった瓦礫を最初、

自衛隊は片付けてくれませんでした。

役所に問い合わせたところ、

「政教分離の観点から、お寺の境内地へは入れない」と

いう回答でした。「政教分離は

国の運営に関することで、災害

時の救援活動には関係ないので

は」と主張しましたが、受け付

けてくれません。そこで、「境

内地にある石巻市民の瓦礫を撤

去してください、宗教活動がで

きない」と主張し、命令を撤回

していただきました。これは漫

才のようですが、本当の話です。

仲間の寺では、「新しい土地

に本堂を建てるから、いまの本

堂のある土地を民家のように買

い上げていただけるか」と問い

合わせたところ、「宗教法人の

土地は買い上げできない」との

回答です。確かに宗教法人の土

地や建物は無税であり、その活

動にも税金は優遇されておりま

すが、結局「信者の基金により

修復してもらいなさい」との結

論でした。私の西光寺の会館

は、その修復費用を見積もりと

一億一千万円でした。町の商工

会議所では、商店に対して国に

補助金を申請する制度があり、

店を立て直す場合、費用の四分

の三を補助してくれます。しか

し、宗教法人は入会できないと

断られました。どこにも救いの



手がないので。

遺骨が見つかったと喜び、

涙を流した

遺骨が見つからないまま、葬

式をしている方がたくさんいま

す。私は震災の年、四十九日の

合同供養祭のときには「とにかく

探そう」といいました。しか

し遺族は一〇〇日あたりになる



ゆっくりと安らげる慰霊公園

と疲労の色が濃くなり、「お葬式をしたほうがいいのでは」と言い始めます。でもその時に私は、「あきらめて葬式をするのはやめよう」と伝えます。

探したいけど見つからないという苦しみがあります。一〇〇日間、一日たりとも安らかに

ならない心の苦しみがあります。そして、海の底にいるのか、火事の中で燃え尽きてしまったのか分からないけれど、亡くなった方にも見つけてほしいと持っている苦しみがある。あなただけではなく、死んだ方も苦しんでいるのです。

この世でその両者を助けられる人は、誰もいません。それを救ってくれるのは仏様です。あなたの「見つけれない」という苦しみ、故人の「見つけてほしい」という苦しみ。「毎日、子供が捜してくれる。悪いな」と思う父ちゃんの苦しみも含めて、仏様にお願する、預けるのが葬式です。

「あきらめた」といって葬式をするのではなく、「お願いします」と元気に葬式をやろう。

そうすれば、父ちゃんに対して後ろめたい気持ちで葬式をしないで済みます。自分の気持ちに誓いを持ち、本当に体も無くなって見つけられなくても、自分もいつか死ぬのだからあちらの世界で必ず逢う。自分では出来ないことを仏様に全てお願いする、そういうことを固く思つて葬式をするのです。

このような話をして、納得していただき、葬式をするようになりしました。一軒ずつ向き合い、

あなたにとってのあなたの葬式をしています。あなたらしい葬式を、じっくり時間をかけて行います。骨なしの葬式をした後でお骨が見つかったときは、「さすがうちのおやじだ」と喜んで涙を流しながら遺骨を本尊の前に置いて、帰ってきたことをみんなで見え、また手を合わせました。

こんなことが日常で起こっています。だから、一軒ずつ丁寧に向き合っています。

生きていくことの心の持ち方、生き方をどうして探したらよいか、そうしたことを考える場所

先日、「祈りの杜」の記事が浄土宗新聞に掲載されました。それを読んで、北九州に住む方が、石巻に実家があったそうですが、「実家のそばに祈りの杜」で起こっています。い



植え込みの茂みには観音様やペットも

つも週末には観光バスがやって

来て、騒がしくしています。で

も、「祈りの杜」には来ません。

そんな中、静かに立ち寄り、座

り、帰っていく方の姿がありま

す。騒がしい被災地の中で、自

分の時間を見つけて過ごしてい

く方がいます。私達が最初に「祈

りの杜」がほしい、安心できる

場所、広場がほしいと考えたと

おりになって

います。

「祈りの杜」

は、人々が静

かにたたず

み、自分を見

つめる時間を

つくっていま

す。当初考え

たことが、現

実に始まり

ています。どれだけの人が来る

かわかりません。あの「祈りの

杜」という小さな広場に対して

思いを持ち、守っている人がい

ます。「雨が降れば心配して見に

来るおじいちゃんがあります。自

分たちの心、祈りの場所を守っ

ていこうと思われています。今

後、あそこがどのように育って

いくか。地元の私達の心がけが、

本当に安らかな「祈りの杜」を

完成させると、改めて思ってお

ります。

全て、この震災が私達に与え

た試練であります。生きていく

ことの心の持ち方、生き方を、

どうして探したら良いのか、そ

うしたことを考える場所が「祈

りの杜」です。今後も、誰にも

それを邪魔することができない、

「清らかな聖地」として守って

いきたいのです。

「祈りの杜」の南側は、国営

による宮城県の慰霊の地にな

ります。四八ヘクタールとい

う広大な慰霊の地の設計のもと

は、「祈りの杜」にあると思っ

ています。マスコミを通じて発

言し、それが感じられる人は「祈

りの杜」を見ています。そこに

座っていただければわかります。

何気ないが、全部入っています。

苦しみや悲しみを乗り越えるた

めに、これは被災地に限らず、

人間が生きていくうえで「祈り」

は大切なものです。それにより、

人は自分の気持ちを掘り下げて

いく。これこそ最も大事な価値

観であり、時代を超え、国境を

越えていきます。

この「祈りの杜」で今度、初

めてキリスト教、神道、イスラ

ム教など、他宗教の二〇名くら

いの方々が参加され、宗教の垣

根を越えて助け合おうというイ

ベントが開かれます。その象徴

が、「祈りの杜」なのです。小

さな広場ではありますが、人々の

意識が集まって来ています。だ

から、今後の動きにも注目して

ください。

震災後、私は全国各地で講演

し、お伝えして来ました。でも、

今は地元でとにかく拝みたいの

です。もう出張にも出たくない。

地元・石巻で遺族の方々と拝む

ことが、一番良いのです。

※本稿は、2014年4月14

日に開催された埼玉県石材業協

会青年部総会における樋口伸生

会長の講演内容を一部編集して

掲載します。

「寺業」は 仏教界を変えるか

西出勇志

共同通信長崎支局長

秋田光彦住職と初めて顔を合わせたのは一九九二年五月二十五日、浄土宗の宗門校である佛教大が、学生向けに新機軸として打ち出した演劇法要の場だった。

「阿弥陀仏を見たかった男」と題した三幕芝居の構成・演出を手がけた秋田住職の仕事と発想に関心を持ち、人物紹介の記事を書いた。当時もてはやされた広告会社の売れっ子プランナーのような滑らかで理知的な語りど、僧体とのギャップ。才気煥発の異才とはこういう人のことを言うのだろうかという強い印象を受けた。

スクラップブックを引っ張り出してみると「宗教とロック、映画を同時に語る三六歳の若き浄土宗僧侶」と記している。宗

教とロック、映画を同時に語る僧侶は現在でこそ珍しくはない。ただ、当時はそうではなかった。この取り合わせは実に新鮮だったのである。

記事中には「平成八（一九九六）年、墓なし、檀家なし、葬式なしのイベント寺の完成を予定しており、都市化の中で失われた住民の連帯感を呼び戻すことを目指す」とある。それが現在の應典院である。九七年以降、地域に開かれた寺として、NP Oとの協働の場として、アートの発信地として、生老病死のすべてを視野に入れながら、應典院は常に先頭を走ってきた。仏教界に新風を吹き込んできたその秋田住職のこれまでの仕事を一語に凝縮、概念化すると、今回の主題である「寺業」という

言葉に行き着くだろう。

昨年三月、その應典院で開かれた「寺業再興」は、画期的なパネルディスカッションだった。テーマの喚起力の強さを反映してか、ホールはぎっしりと満員の参加者であふれる。北海道から九州まで幅広い地域から集まり、約七割が寺院関係者だという。パネルの主催者であり雑誌「みんな」を発行する川本商店の川本恭央社長の開会あいさつの後、秋田住職が登場した。「寺業とは何か。辞書にこの言葉はありません。まず、一瞬考えてみてください」と呼びかけ、一拍置いた後に「いま、みなさんが連想されたものが寺業です。進行形の言葉で定義はありませんが、この言葉を手がかりに難しい状況にある日本の仏教、寺



秋田光彦師

院が切り開いていくためのチャレンジができないかと思っ「ます」と語った。秋田住職らしい狼煙である。場内が熱気を帯びる中、パネルは始まった。

描き出された輪郭

秋田住職が冒頭、スライドを用いて示したのは【10】のポイントだ。列挙してみよう。

【1】宗教宗派、地域、寺によって考え方は多種多様。まず多様なローカリティを尊重しながら

仏教者の個性を生かそう。

【2】危機感は大それたが、どう生き残るのか、という後ろ向きな発想に陥らない。「寺業再興」はノウハウを学ぶための場ではない。

【3】「経営・経済」お金儲け」と考えない。お寺と社会をつなぐ回路として、節度をもって肯定的にとらえる。

【4】「寺業」を現在の先祖供養や葬式仏教と選択的にとらえない。むしろ、生老病死を支える、公益的な営みとしてとらえる。

【5】三・一一以降の仏教者の動きに注目する。緊急事態や地域復興に果たすお寺の役割を積極的に評価していく。「寺業」は仏教と社会の交流を促進する。

【6】「官」だけが公共ではな

い。それぞれの地域において、

どんな公共課題があるか、その解決のために、「寺業」はどんな貢献ができるか、仮説してみる。

【7】仏教者の社会活動は活発化しているが、まだ限定的だ。教団組織に求めすぎず、「寺業」を通していかに「自立的」「持続的」活動が可能か考えよう。

【8】寺単独では限界がある。パートナーは誰か。「寺業」を通して、外部との対話・協働は可能か。

【9】この十五年、先行してきたNPOの事例に学ぶ。組織マネジメント、人材、そして財。そこから、寺の使命を考え直す。

【10】なぜ寺業「再興」なのか。寺の原点を踏まえ、現代の寺の

役割を「再考」しよう。

「寺業」の輪郭はここに描き出されていると言っ「いいだろう。秋田住職は、経済や経営を切り口にしながら寺と社会が

つながり、「いのち」の全てにお寺が関わっていく取り組み、つまり社会活動が「寺業」だと認識することを強調し、この言葉が持つ可能性に言及した。「NPOのやっていることは、実は寺院の原点に非常に似ていると思います。通じ合う共通項は何なのかを積極的に読み込みながら、原点に立ち返って『再興』する」という思いが『寺業再興』のネーミングに込められています。それが今日の議論のスタン

スです」

継承と消費者化

基調講演を担当したのは、日本の宗教界を経済の観点から捉えている野村証券金融公共公益法人部の塚寄智志公益法人課長。この人選も「寺業」のありようを考える上で興味深い。ただ、塚寄氏は経済の視点からのみ仏教を語ろうとしたわけではない。自らの深刻な病気体験を語った上で、お寺について「どういうふうに向かっているのか、という相談をするところだと思わなかった」と言

う。集まった僧侶たちにとっては心外な、あるいは耳の痛いひと言だっただろう。ただ、それが一般の認識であり、宗教界とのギャップ、常識がズレていることを考えてほしい、とまず苦言を呈した。

時代」だ。「家」と死者のかかわりの中に寺が重要な機能として存在した時代は終わった。子から孫へという家族の縦の時間軸から檀那寺が消えていく。寺の永続性を担保するためにどうするかが問われている。

一度、その中心に戻るよう努力することを提言する。「人が集まるから情報が集まる。人が集まらないと情報は発信できない。『うちのお寺ではできない』と必ず言われるが、やらないからできないんです」。シビアな言葉

だ、塚寄氏は経済の視点からのみ仏教を語ろうとしたわけではない。自らの深刻な病気体験を語った上で、お寺について「どういうふうに向かっているのか、という相談をするところだと思わなかった」と言

塚寄氏が強調したのは「継承」問題だ。日本の人口推移を提示しつつ、今後毎年二〇万人ずつが減少していく見通しを述べ、「経験したことがないことが一気に加速度的に起こっていく」と語る。死者が増えるからと言って、お寺で行われる葬儀が増えるわけではない。継承の

さらにもう一つ、塚寄氏が挙げたキーワードは「消費者化」。葬儀や法要をサービスと捉え、その対価を支払う感覚が一般化しつつある。金銭を主たる媒介とした提供者―消費者の関係が固定していくとき、宗教性や信仰の位置づけは困難となる。

塚寄氏のキーノートスピーチの次に登壇したのは、松本紹圭氏。超宗派若手僧侶らによる情報集積地であるネット寺院

無形の価値と聖性

ポイントが、寺院サイドよりも檀信徒、門徒サイドにあると塚寄氏は指摘する。確かに人口移動も激しく「どこで生まれ、どこで死ぬか分からないのが今の

こうした寺檀関係の解体と消費者化をもたらすのは、地域コミュニティにおける寺の存在の希薄化にほかならない。寺院はかつて地域コミュニティの中心にあった。塚寄氏は、もう

塚寄氏のキーノートスピーチの次に登壇したのは、松本紹圭氏。超宗派若手僧侶らによる情報集積地であるネット寺院



塚寄智志氏



松本紹圭師

「彼岸寺」を立ち上げた浄土真宗本願寺派の僧侶である。東京のビジネス街にある寺にカフェを開き、寺と地域が結ぶ新しい可能性を示し、大きな話題にもなった。

インドで経営学修士を取得した松本氏は一昨年、経営の観点からお寺の役割を捉え直す一年間のプログラム「未来の住職塾」を開設した。全国の志ある僧侶らに講義やワークショップを行い、塾生はそれぞれに「寺業計画書」をまとめる。ここでのつ

ながりから宗派や場所を超えた緩やかなネットワークが創出され、各地で興味深い動きも出始めた。松本氏の登場は、日本仏教界における一つの「事件」と筆者は考えている。

経営用語と仏教用語が飛び交う「未来の住職塾」の中でもユニークなのが「お寺360度診断」だ。地域の人たちや近隣寺院、葬儀社、さらに寺族がお寺をどのようにみているか、アンケートを取って明らかにしている。松本氏も今回のパネルで詳細にこの試みを紹介し「人の力や組織の力、関係性の力を洗い出し、無形の資産のありようを明らかにしていく」ことの重要性を指摘した。

長年にわたって寺が培ってきた無形の価値。「お寺にはたく

さん宝がある」という松本氏が強調した言葉である。伽藍や墓地といった目に見えるものではなく、「これからのお寺を考える上で重要な要素であり、非常に注目している」という。

寺を継続させる前提の必要条件として松本氏が力を入れたのは「聖性」の存在である。経営が軌道に乗り、安定的に持続していくことだけが「住職塾」の目的ではない。社会的な活動でもNPOと何が違うのかを考えると、「『事業』を『寺業』にするものは何かと言えば、聖性です。寺業の聖性を問わないといけません。聖なる寺業を成し遂げるために、どういう戦略が最適かという議論が必要なのです」。まず、伝えたい仏教ありき。寺院経営はそこから始まるというの

は、極めて当然の主張だろう。

地域に「民の力」

NPOは寺院の原点に近い、と秋田住職は冒頭に語った。もともとあった営みである「寺業」を「再興」しようとするとき、既に現代社会で定着してきたNPOやソーシャル・ビジネスの事例を知ることが大きなヒントになるだろう。NPOの専門家である龍谷大公共政策学部の深尾昌峰准教授が続いて登壇した。

「お金をどのように社会の改善に振り向けていけるかに長年取り組んできました。人口減少や少子高齢化する社会の中で、私たちのありようが大きく変わろうとしています」。そう語る深尾氏が出したキーワードは「市民性」「民の力」だ。

は、極めて当然の主張だろう。



深尾昌峰氏

「地域の困難を突破する力は民の中にある」といい、興味深いエピソードを披露した。「持続可能な地域づくりのために俺は商売をしたい」という中小企業の社長が最近多くなってきたのだ、という。地域が活性化しないとビジネスもうまくいかない。だったら、ビジネスで地域の課題を解決しよう、あるいは活性化のためにビジネスをしよう。そうした傾向が広がっている、NPOのような非営利民間組織と企業の間で垣根が低く

なっている現状を紹介、知恵を絞って仕組みを上手に使い、経済を私たちの手に取り戻していく大切さを示した。

それを踏まえた上で、深尾氏は「日常に埋没してしまっているが、お寺のポテンシャルはすごい」と語る。そのすごさはさまざまな人や組織と協働することで発揮され、そこから自分たちの強みをより知ることでもできる。深尾氏は「これからの社会モデルをつくっていくときに、持続可能な社会という文脈で仏教の役割は大きいものがあるのではないだろうか」と期待を寄せた。

教団の論理と個々の意識

秋田住職を含め四人の話が終わり、パネルディスカッション

がスタートした。お金の収支から教団との関係まで、デリケートな問題にかなり踏み込みながら、フロアからの質問も交えて寺や僧侶の未来を語り合った。

日本社会に登場してまだ日が浅いNPOという立場から寺院について語った深尾氏は「ここにあり続けている価値、安心感

は大きい。NPOに信頼感が無い場合でも、お寺の住職が『応援するよ』といった瞬間、地域社会の中である一定の信頼を勝ち得ることができると存在自体が持つ意義に言及した。

伝統や継承には大きな価値はある。ただ、善し悪しは別として、寺院の場合はそこに世襲という制度も張り付いている。その点に目を向けたのは松本氏だ。

「継承という点、どうしても今

あるシステムから出発してしまう。世襲によって、家から出たことのないお坊さんがたくさんいます」と言う。皮肉な言い方だが、「出家」しない僧侶の存在である。松本氏は、一度外へ出ることでシステムの在り方を外から見ると、その視点を持って内側で生かすことの重要性を述べた。

この指摘に深く同意した秋田住職は、東日本震災で被災地に駆けつけた僧侶の活動を例に挙げた。「若い僧侶がどんどん現地に入っていくって、ふと『自分分は一人だ』と気づく。そうすると、行政やNPO、地元の人先に入っている新宗教の人と対話せざるを得ない。そんな中で『供養してやってくれ』という切実な願いを聞きながら、自ら



パネルディスカッション。寺や僧侶の未来について語った

の聖性の価値に気付き直す。僧侶として自信が持てなかったのに『自分がやることはこれだ』と思っ、堂々と葬式仏教をして帰ってきた。それは正解だと思えますね」と語った。

東日本大震災で被災地に入り

意識が変わった僧侶は多い。た

だ、彼らの相当数が教団単位

ではなく、有志ベースで行動を

起こしている点は注目に値する。

震災という非常事態において、

個々の仏教者の切実な問題意識

と教団の感覚に明らかにズレが

生じている。それは震災対応だ

けではない。長く続く組織は硬

直化が免れず、特に仏教界は激

変期といえる現在においても危

機意識がさほどみえない。従来

型の組織や思考のまま、どっし

りと腰を落ち着けているように

感じられる。

教団との付き合いも多い塚寄

氏は「檀信徒、門徒の動向とか

意見は、ほとんど把握できて

いない」とみる。それは、向き

合うべき相手のニーズに敏感で

はないということに通じる。経

済的に安定した寺院出身者が多

数を占める執行部や宗議会を中

心とした教団内論理で完結して

いて、激動する時代への目配り

が利いていないからではない

か。寺檀関係の変化だけではな

く、教団―寺院の関係において

も、過疎化を含めた現代の寺院

状況への危機の切迫度合いが現

場と中央で著しく異なっている。

モデルなき時代に

松本氏も危惧を示した。「モ

デルなき時代なのに、宗派はあ

るべきお寺像に向かい、同じ発

想でお寺をつくっていかうとし

ています」という。新たなチャ

レンジをしようとしても「宗派

の教義と自らのやりたいことの

落としどころを見つける発想し

か出てこなくなる」ことへの懸

念だ。住職塾が超宗派を前面に

出すのも「定規のないところで

のお寺づくり」を目指すからだ

という。確かに制限付きの発想

では、新地平を切り開く力につ

ながりにくいだろう。

この「超宗派」という言葉は

今後、仏教界を考える上で最大

のキーワードだと筆者は考えて

いる。SNSの発達などネット

環境の充実によって、若手僧侶

を主体とした超宗派活動が盛ん

になり、流れを形成するように

なってきた。教団、宗派に関係

なく、個々の寺院や僧侶らが自

らの思いでかわっていく活動

はさらに広がってさまざまな

人々を巻き込み、これからの潮

流となっていくはずだ。

「聖性のない薄っぺらで平

べつたい社会は嫌なので、お寺にがんばってほしい」という松

本氏は、重要なのは「菩提心」

だと言い、「そこに向かつてい

くための営みであれば、どんな

やりかたを取ってもお坊さんら

しい役割を果たせる。仏教は自

由自在です。自由自在に本当に

大事なものを追いかけて行く役

割がお坊さんにはあります」と

語る。本来、仏教が持つ変化へ

の対応能力の高さ、自在性がこ

れほど発揮させやすい時期はな

いかもしれない。「お坊さんは

今、本当に面白い時代に生きて

います」。松本氏はあくまでも

自然体だった。

秋田住職もこれに呼応し

た。「モデルなき時代だからこ

そチャンスという呼び掛けは希

望を与える」と語った上で「私

たちの大先輩が取り組んだ、仏教福祉の原点の心をもう一度取

り戻したときに、この無縁社会

という現在の苦境にあつて『今、

やるしかないのだ』と直感的に

感じます。私たちにできないは

ずはない」。松本氏の活動に賛

意を示し、宗派を超えて意識を

持った僧侶が結束、教団レベル

ではなく、地域レベルあるいは

問題ごとに対応していく社会資

源としての寺、僧侶の充実を求

めた。

「仏教の最大の発見は、悲し

みや苦しみを聴くこと」。刺激

に満ちた討議も終盤に差し掛か

り、秋田住職から根源的な言葉

が口をついて出た。「人々と共

に生き、弱者とともに生きるこ

とで『聖性』が、こぼれ落ちて

くる」

これに先立ち、秋田住職が紹介した本がある。叢書「宗教と

ソーシヤル・キャピタル」第

2巻「地域社会をつくる宗教」

(大谷栄一・藤本頼生編著、明

石書店、全4巻)だ。宗教社会

学の世界で今、最もホットな

テーマの一つと言っているだろ

う。構造物などハード面の社会

資本との違いを出すため、社会

関係資本と訳されることが多い

ソーシヤル・キャピタルは、信

頼や規範、ネットワークなどの

ソフトパワーを指す言葉。ポス

ト福祉社会が進行する中、人々

が支え合いの関係を築くための

重要な概念として浮上している

が、宗教が持つ互恵性や倫理観

がソーシヤル・キャピタル形成

に大きな役割を果たすのではな

いかという観点から、應典院の

実践を含めた数多くの事例を検討している。

『聖性』を言葉に変えると、

このソーシヤル・キャピタルが

一番近いんじゃないか。刺激的

な議論が始まっているなど思う。

聖性はあるのではなく、つくる

ものです。私が思う聖性は寺業

の営みの中から生まれてくるも

のだと思っています」。秋田住

職は締めくくった。十五年以上

にわたる應典院での先駆的「寺

業」のバックボーンが提示され

た気がした。

変動と再編成

議題の設定からデイスカッ

ション、質疑応答まで含めて非

常に充実した企画だった。国家

と社会の関係が劇的に変化する

中で注目を集めているソーシヤ

ル・キャピタルやソーシャル・

ビジネス、あるいは「新しい公

共」に深く関連し、日本仏教の

今後の在り方を考える上で非常

に重要な問題提起があった。話

題にしにくいお金をめぐり、一

歩踏み込んだ指摘もあった。日

本の未来を見据えた社会的要請

を先取る形での応答があった。

いずれにせよ、「寺業」の前提は、

僧侶の社会的自覚である。社会

環境の変化の中で醸成されてき

た空気があったとはいえ、これ

を一気に呼び起こしたのは東日

本大震災であることに異論はな

いだらう。

災厄の悲しみの中であって、

仏教は「死」を通して被災地の

人々と向き合い、大きな存在感

を示した。東日本大震災が浮き

彫りにしたのは社会の後景に沈

んでいた宗教、特に「日本仏教」

である。さらに重要なのは送り

手の側の変化だ。秋田住職がエ

ピソードを披露している通り、

震災はこれからの担う若手僧侶

にとつて、葬送儀礼の重要性を

再確認させるとともに、現代社

会において、地域において、寺

院は何かできるか、公共的役割

を考える大きなきっかけになっ

た。「寺業」への目覚めである。

メディアの変化も興味深かつ

た。僧侶の真摯な祈りの姿がメ

ディアを通して広く出たのは近

年、まず例がない。東北の地に

おいてしつかりと息づく仏教が、

地域共同体の中で果たしている

重要な役割をメディアが確認し、

多くの人に伝わった。今回の主

題の一つとも言える「聖性」の

現れだ。これら全体を通し、現

代日本において「仏教の発見」

があったのである。

パネルでは「寺業」そのもの

の方向性よりも、宗派や教団に

ついての見解が興味深かった。

こうしたセッションで、ここま

で宗派、教団への距離感が示さ

れたものはそれほどないのでは

ないか。冒頭、秋田住職が示し

た【10】のポイントで、最も痛

烈なメッセージは「教団組織に

求めすぎず」だと考えている。

筆者が社会人になったのはバ

ブル経済がまさに始まるうとい

う時期だった。政治的には五五

年体制が敷かれたまま、東西冷

戦はまだ継続中であり、官僚機

構も財界も堅固で、戦後形成さ

れてきた秩序に大きな変化はな

かった。当時、今日の政治、国際

経済、社会状況を誰が予想でき

ただらう。銀行の統合や日本航

空の経営破綻も想像できなかった

はずだ。

この時代のうねりの中にあっ

て仏教教団に大きな変化は無

かったように思う。今回、パネ

ルで社会資源としての寺院の潜

在的な力を全員が認め、若手僧

侶を中心とした新たな動きを確

認した。ただ、そこに教団の姿

はない。この乖離が大きくなれ

ば、超宗派の流れの中で仏教界

全体に地殻変動、再編成が生ま

れるかもしれない。われわれは

三十年の間、本当にあり得ない

ような事態を数多く経験してき

たのである。

※2014年春「サリュースピ

リチュアル」8号掲載の「『寺業』

は仏教界を変えるか」を再掲



お寺に生きる

—ひとさじの会の活動を通じて

吉水岳彦

浄土宗光照院 副住職

ひとさじの会の

活動をはじめて

数年前から社会的に弱い立場にある方々の支縁をさせていた。だこうと、同じ志の仲間とともに「ひとさじの会」を設立しました。

基本的には月に二回、東京都内におられるホームレス状態のおじさんたちに、ボランティアの方々と一緒に一個一合の大きなおむすびーコンビニで売っているおむすびの三倍以上の大きさーを作り、お茶や市販菓等を渡して歩きます。おじさんたちの中には、一週間以上食べていないと話す方もあれば、長い間人と話をしていなかったという方もいらっしゃいます。活動では、一人ひとりに手渡ししながら



大きめのおむすびを、心をこめて握ります



吉水岳彦上人
1978年東京生まれ
大正大学人間学部仏教学科卒業
同大学院博士(仏教学)取得
浄土宗光照院副住職
大正大学非常勤講師
淑徳大学非常勤講師

いろいろなお話をうかがわせて
いただきます。

「オレ、九州以外のすべての
新幹線の線路工事にかかわった
んだ」「数年前まで、遠洋漁業
にたずさわっていて、宮城の沿
岸部に住んでいたんだ」「原発

の仕事はキツイんだよな」など
など。わたしたちが生活の中で
日頃から恩恵を受けているもの
を造り、運び、働いてこられた
けれど、病气やリストラといっ
た理由で路上での生活にいたっ
たということを話してください
ます。

そして、たった一個のおむす
びをもらったことに対して、ニ
ニコと「ありがとう」と深々
とお辞儀をされたり、「まだあ
そこにいる仲間がもらっていな
いと思うよ」と、友人に取次い
てくださったりします。

「ホームレス」というと何か
「いけないことをしてきた人」
「ダメな人」というレッテルを
貼り、自分たちとは異なる存在
ととらえて見て見ぬふり、なん
てことは、多くの方に経験があ

ろうと思います。少なくともわ
たしにはあります。大人たちが
「あの人たちは怠けている人な
のよ」と教えてくれたとおりに、
何の疑問も持たずに大人になり
ました。活動をはじめるとあた
り、ホームレス状態のおじさん
たちと接して感じたことは、ど
こにでもいる「普通の人たち」
だということでした。

当たり前のことなんです。で
も、心のどこかに「この人たち
はわたしとは違う」という気持
ちがあつて接することができ
ていなかったのです。話している
うちに、そうすることが何とお
かしなことなのか気づかされた
のでした。そして、「すべての
人は平等である」と学びながら、
実際には全然平等に人を見るこ
とができていない自分がそこに



この日のおむすびは400個。冷ます間に、手分けして後片付けをします

いたのです。

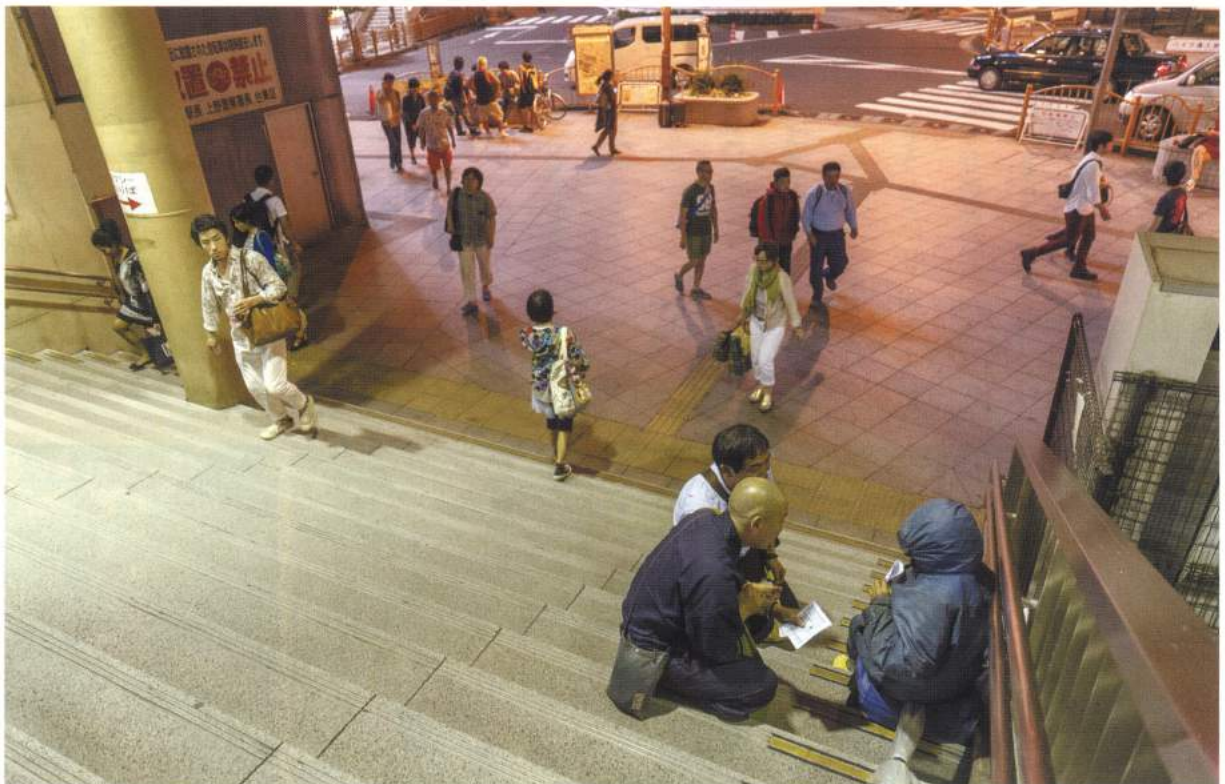
本当に働けないの？

お寺には、路上や公園に野宿生活をしているおじさんたちにおむすびを配るボランティアの方が、寒い中もお越しになります。

はじめて来た方々からよく尋ねられることは、「仕事は選ばなければあるんじゃないですか？」「働く意思さえあれば路上生活から抜けだせるのではないですか？」というものです。お尋ねの通り、確かに仕事はあるのです。ただ、一度住居を失って「住所不定」となった人を雇うようなところはほとんどなく、路上生活の状態でも現金収入を得ることが出来る数少ない仕事——アルミ缶拾い・段ボール回収・

町の清掃など——を一生懸命しているのです。仕事を選ぶ余地が少ないのが現実です。

でも、おじさんたちは誰もが寝ている朝方に起きて空き缶を回収してまわり、夜までこれを続けます。とても少ない賃金ですが、それでも働けるならと毎日朝から晩まで走りまわっているのです。わたしたちの目には、昼間からワンカップ酒を片手に歩く彼らの姿ばかりが映るのかもしれませんが、実際には働けるならば働きたいという方がたくさんおられ、できるかぎり自分で働いて生活したいと一生懸命な方もいらつしやるのです。意識をしていないと、なかなか見えてこないものはたくさんあります。路上に生活するおじさんたちの生活もその一つかも



多くの方が往来する上野駅前。1人1人お話を聞きながらおむすびをお渡します

しれません。でも、その生活が見えにくく、異なる生活スタイルから多少違和感を覚えることはあるかもしれませんが、わたしたちと同じ人間であることを忘れて、まして危害を加えることなどあってはならないことです。それは桜の木を冬に見て、花が咲いていないから枯れているのだと、春を待たずに斧で切り倒してしまうような、極めて乱暴なものの見方ではないでしょうか。

わたしたちの眼差し

残念なことではありますが、この数年、路上生活者の襲撃事件が増加しています。あまり知られてはおりませんが、東京スカイツリー建設など、都市再開発にともなう強制的な路上生活

者の追い出しに比例して襲撃事件が増加していることは、東京都内各地の事例を考へても間違いないく、ゆゆしき社会の問題といえるものです。

わたしたちがおむすびの配食を行っているおじさんたちも、被害を受けているとお話してくださいました。本当に胸が苦しかったです。数名の子どもたちが集団で投石したり、堤防の上から堤防の下にあるおじさんたちのテントめがけて自転車を落としたり……。一歩間違えれば死に至らしめるようなことが、子どもたちによつてなされているのです。こうしたことは、路上生活者に対するわたしたち大人の眼差しと無関係ではないでしょう。

襲撃事件があった後日、複数

の支援者と話し合っていたときのこと。一人の支援者から「生きていて良い」「いのち」と生きていてはいけない」「いのち」があることを、大人たちが子どもたちに行動で示しているのではないだろうか」という言葉が出ました。わたしはこれを聞いてゾツとしました。「いのち」に区別なんてないと普段口では言うものの、実際には他人の姿だけを見て勝手に格付けをしたり、それを聞いて喜んだりしている人のなんと多いことか。

テレビなどを見てみると、顕著に感じるのですが、きれいなもの、美しいもの、元気なもの、すぐ優れているものはあつて（存在して）も良いが、きたないもの、苦痛を感じるもの、くさいもの、弱いものは、あつ



常に笑顔で丁寧に接します



出発前には如来さまにお念佛を申し、活動での注意事項を聞きます



てはならないものという思考や風潮が、社会の中に広がっています。これは決して悪意をもって行われているものばかりではないでしょうが、何気ない会話の中で自分とは異質な人を見下したり、馬鹿にしたりするのは延長線上にある問題なのではないかと思つたのです。

特に襲撃した子どもたちの話を聞くと、多くが学校や家庭で自尊心じぞんかんじょうを保ちにくい状況にあったようです。これは子どもたちが、「自分は弱くない」「自分は優れている」ことを示そうとしてさらに弱い立場の子どもや、町場にあつては路上にいるおじさんたちを排斥し、これによって自分が必要とされる側のもの、すなわち「生きていて良い」のち」であることを自

ら感じようとしていたのでしよう。これは切迫せつぱくした心からの行動であり、本当に悲しいことです。

襲撃を行った地域の学校の対応がどうであつたかという点、自分の学校の生徒かどうかを調べることはできないので、警察にお願いしたいと話すところもありました。しかし、警察が動いて捜査の末に生徒を捕つかまえた場合、生徒を事件の加害者、犯罪者としてしまうことになります。もちろん、危害を加えることは許されませんが、子どもたちを犯罪者にしてしまうことも避けたいところです。だからこそ必要なのは、路上生活をしているおじさんたちのためにも、子どもたちのためにも、事件にしてしまう前にどの



おむすびに手のぬくもり、そして心をかかわせます

ような立場にある人も等しく尊
い“いのち”を有していて、傷

つけていい“いのち”などない

ということを教えることです。

いかなる人生の背景を持つ人で

あっても自分と同じ存在である

ことを自らが態度で示し、子ど

もたちにしっかりと伝えていく

ことが求められていると思うの

です。

社会においては、自分と生活

のかけ離れた人や志向の異なる

人、信仰を異にする人など、違

和感を覚える存在にたくさん出

会います。わたしたちに必要な

ことは、その違和感から相手を

蔑^{さげす}んだり傷つけたりするのでは

なく、自分には知りえない人生

を歩んできた人なのだと受け取

り、敬意をもってあたたかく接

することではないでしょうか。

心いたらぬわたしだけけれど

ひとさじの会が発足してから

というもの、ホームレス状態の

おじさんたちへおむすびをお渡

しして歩くようになり、震災の

被災地における炊き出しや子ど

も会等の活動も充実するように

なりました。一方で、お念佛の

み教えをいただく僧侶として支

縁活動やボランティア活動にい

そしむことは“正しいこと”な

のかを、よく尋ねられるように

なりました。

「精神的な救いを広く施すの

が僧侶の為すべきことであって、

現実生活上の苦に対する具体的

な活動は、僧侶以外の人がすれ

ばよいことではないですか」と

言う人もいれば、模範解答のよ

うに「お念佛やご法話、読経な

どを行うことが僧侶の本分で

あって、ことさらに社会活動を

行うべきではない」との見解を

示される方もいらっしゃいます。

こうした諸先輩からのお話には、

ずいぶんと考えさせられました。

しかし、自分自身を振り返っ

た時、もはやわたしにとってお

念佛を申す日々を支縁活動を行

うことはごく自然なことになっ

ており、「しなくてはならない」

ことではなく「せずにはいられ

ない」ことになっていると気づ

いたので。如来さまの御前で

お念佛を申していると、為すべ

きことは為さず、為すべからざ

ることばかりを繰り返している、

心いたらない自己の姿が浮かび

ます。まことに如来さまに恥ず

べき姿です。そんな愚かな自分

を見つけるたびに、少しでも如

都会の片すみ、縁があつて出会った方々に、
少しでも安心を与えることができたら





浄土宗光照院本尊 阿弥陀如来

来さまにお喜びいただける自分
になりたいという心が湧いてく
るのです。

そして、縁あって出遇った人
の苦を感じるとき、できるかぎ
りのことをさせていたきたい
と思うのです。たとえ自分の力
で助けられなくても、せめて不
安なその人の隣にいたいと思う
のです。

如来さまのお袖をつかんで

法然さまが生涯をかけてお伝
えになったお念佛のみ教えは、
いかなる人にも平等に如来さま
のお慈悲が届いており、等しく
救いにあずかることができる
いうものです。そこには男女も
頭の良し悪しも、仕事の内容も
関係ありません。もって生まれ
た性格や過去の行いも一切問

ただすことなく、ただ御名を呼
ぶものをあたたかな救いの光明
で照らしてくださるのです。

わたしはこの教えに出会って
いながら、法然さまの求めら
れた「すべての人の平等の救
い」をうわべでしか理解してい
なかつたことを、ホームレス状
態のおじさんたちとの出会いに
よって気づかせていただいたの
でした。困難を抱えている人に
寄り添うことはキレイごとでは
ありません。そうした中で、平
等の救いというものを人に説き
ながら、見て見ぬふりをしてき
た自分がいかに愚かであるか深
く考えさせられました。

最期の時に極楽へ迎えとり、
菩薩さまに生まれ変わらせてく
ださる如来さまの完全な救いと
異なり、わたしたちの支縁はた



如来さまはただ静かに、
心の内に耳を傾けてくださいます

だおむすびを一つ差し上げると
いうだけのきわめて小さなこと
です。とても目の前で苦しんで
いるたった一人を救うこともか
なわないでしょう。それどころ
か、路上に横たわるおじさん一
人ひとりに等しく人としての敬
意をもって接することすら、満
足にできていないかもしれませ
ん。

活動をはじめてから数年がた
ちましたが、自己の無力を痛感
し、反省させられることばかり
です。これで良かったと思える
活動など一度もありません。自
分が何もできないばかりに、路
上で孤独のうちに亡くなって
いった方もあります。逃げ出し
てしまいたくなるような強い無
常を感じることもあります。

しかし、自坊の本尊さまの前
に座ってお念佛を申すと、如来
さまはただ静かにわたしの煩悶
する心を聴いてくださいます。苦
しい胸の内を如来さまに聴いて
いただくことが、心の底からあ
りがたく感ぜられるようになって
たのも、活動をはじめてからか
もしれません。

お念佛が終わると、幼い子ど
もが母のお袖をつかみながら知
らない大人の前にでるように、
如来さまの慈悲のお袖をつかみ
ながらさまざまな方々に出会い、
お育てをいただきながら進んで
いこうと思うのです。

お寺の役割—支縁と修養—

お寺で炊き出しを行うように
なって五年以上が経過したいま、
伝統的な佛教寺院であることで

安心感があるとの口コミや、路
上で亡くなった方への祈りの時
間に心が落ち着くとの話が広ま
り、たくさんの方のボランティアの
方がお越しくださるようになり
ました。さまざまな人生の背景
を持つ人がここで出遇った人と
仲良くなり、お寺で会って語り
合うのを楽しむ姿を見せていた
だくと、お寺が元気になってい
くような感覚があります。

参加者からは「多くの生活困
窮者に出遇うことでたくさんの方
の学びを得させてもらっているの
もありがたいことですが、さら
に、こうしたご縁を頂戴できて
本当にわたしは幸せ」という感
想も聞かれるようになりました。
中には、このご縁で結婚する人
まで現れはじめました。そんな
周囲の反応に、お寺が「ご縁の

場」であるとともに、訪れる人の「癒しの場」にもなっていることを、わたし自身が実感するようになりました。

そんなある日のこと、一人の女性がお寺にやってきました。聞けば、他の生活困窮者支援団体からひとさじの会のことを教えてもらって来たといっています。彼女がお寺に来た理由は、大切な人を亡くしてからというもの、毎日悲しくて悲しくて涙がずっと止まらず、どうしたらこのどうしようもない悲しみと寂しさから脱せられるだろうかという悩みでした。日頃のボランティア活動のようにおむすびをお渡しするわけにもいかず、どうしたらよいかと迷いながらも、ただひたすら女性の想いを聴かせていただくことになりました。

ポツリポツリと涙ながらに語る彼女の言葉には、人生の大半を一緒に過ごしてきた亡き伴侶への愛情がこもり、その大切な人に対して何もできていない自分の無念さが伝わってきました。

また、お話しをうかがっているうちに、彼女が伴侶のためにお葬式を出してちゃんとお別れが出来なかったことに対する悔恨を抱えていることや、失った大事な人のことを想う時に、心をどこに向けていいかわからないうような不安感を持っていることに気がつきました。

わたしは、彼女のためにさせていただけることが何かあればと思う一心で真剣にその声を聴き続けました。

話の途中、彼女はお葬式が出せなかったから、そのことで自



おむすびを握り、また次の釜が炊けるまでのひととき。人と人のつながりを実感できる、幸せの時間です

分の大切な人は救われないので

はないかとお尋ねになりました。

そこで、「間違いない極楽へ救

いどつていただけられるように如来

さまにお願いしますか」とわた

しが聞き返すと、「ご迷惑でな

ければぜひに」とお答えになり

ました。女性が家に帰っても手

を合わせやすいように、まずお

位牌をご用意し、一緒に手を合

わせてお念佛を申しました。女

性は本堂で泣きながらお念佛を

申し、深い愛情をもって大事な

人を送ったのでした。

帰り際、女性は少しさっっぱり

とした表情で「寂しいのは変わ

らないですが、あの人がちゃん

と極楽に往ってくれていると思

えたら少し落ち着きました。こ

れからは彼のために自宅でもお

念佛をお称えしたいと思います。

できれば、どんな風に称えるの

が良いのかも一度教えてくだ

さい」とお話しくださいました。

平易に訳したお経の文句を紙に

記して渡すと、笑顔でそれを受

け取って帰っていきました。

元来お寺は「精舎」といい、

如来さまのみ教えを学び、自ら

修養を積み、精進するための場

所でした。それが長い時間を経

て、日本ではお寺をお坊さんの

住居として認識されるにいたっ

ております。

しかし、そもそもお寺は、そ

の教えに触れた人がありのまま

の自己を見つめなおし、手を合

わせて祈りを捧げるといふ修養

の実践を通じて、心のやすらぎ

を得ていただく場です。訪ねて

きた女性は、わたしにそのこと

を再認識させてくれたのでした。

死のうと思う日はないが

生きてゆく力が

なくなることがある

そんな時お寺を訪ね

わたしはひとり

佛陀の前に坐ってくる

力わき明日を思う心が

出てくるまで坐ってくる

尊敬する詩人の坂村真民師は、

人生のどん底とも思っていたと

いう四十代の苦悩の中でこの

詩をつくりました。ある老人は、

この詩をお寺で読んで自殺を思

いとどまったといいます。また、

ある高校を卒業したばかりの若

い人は、この詩が胸に深く突き

刺さって忘れられなかったとい

います。

生きる間には、避けたいと



隅田川・台東区コースなど、いくつかのコースに分かれておむすびを配布しました



光照院墓地にある共同墓「結」

言っても病気に遭う時もあり、嫌だと言っても身体は衰えていき、遇いたくないと思っても大切な人の死に向き合わねばなりません。これは年齢には関係なく、誰にもおどずれることです。そんな生きていく力がなくなる時、わたしたちは如来さまの前に、今感じている痛みや苦しみを叫び、あるいは、自分の中

のどうしようもなさや、みつともなさを悔いる場を、心の奥底から求めるのでしょうか。そして、時には声を張り上げ、時には静かに、金色に輝くお姿を見つめて一心に祈るといいう行為のうちに、わたしたちは如来さまに受けとめていただいて癒しを得るのです。ありのままの自分を無条件に、そのままに受

けとめてもらえているという実感があればこそ、次に一步を踏み出そうとする心も力も生じてくるのです。

笑顔で帰った女性は後日再びお寺に訪ねてこられました。そして、大切な人のために手を合わせることを教わり、心が落ち着きを取り戻せたことの感謝の気持ちを施したいと、ひとさじの会の炊き出しに参加するようになりました。

みを得るのです。ありのままの自分を無条件に、そのままに受けとめてもらえているという実感があればこそ、次に一步を踏み出そうとする心も力も生じてくるのです。

笑顔で帰った女性は後日再びお寺に訪ねてこられました。そして、大切な人のために手を合わせることを教わり、心が落ち着きを取り戻せたことの感謝の気持ちを施したいと、ひとさじの会の炊き出しに参加するようになりました。

しんどい時、独りでつらさがかかえている時、みなさんお寺に足が向くのかもしれません。混迷する現代であれば、お寺は

いかなるときも道に迷える人の「修養の場」であり、「新たなご縁をつむぐ場」であるという役割を、これまで以上に求められていくことでしょうか。

※本稿は、公益財団法人光明修養会発行の「ひかり」誌にて連載中の「お袖をつかんで」を加筆訂正したものです。

合掌

お寺に生きるわたしもまた、いつまでも多くの人々と共に悩み、歩み続けられるように、生涯にわたって念佛申しながら精進して参ります。

合掌



光照院玄関

みんてら

これからのお寺を考える情報誌

第6号

発行：2015年2月

● 発行元

有限会社川本商店

● 本社

〒107-0052

東京都港区赤坂 2-21-1

● みんてら事業部

有限会社川本商店 川口営業所

〒333-0844

埼玉県川口市上青木 1-7-4

電話 048-254-2222

ファクス 048-254-0888

<http://www.kanze.co.jp>

kawamoto@kanze.co.jp

定価 500 円 (税別)

みんてら

有限会社川本商店 みんてら事業部